

# エクレア

たなかひまわり

「ねえ朗。今日ね、排卵日なんだ」

私の甘ったれた囁き声に、朗は飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。

「まったく……皐月は朝から官能的だな。わかった、今夜な」

そう言うと朗は立ち上がり、食パンをコーヒーで流し込みながら、親指を立てて「任せろ」のポーズをした。

結婚して五年が経っていた。幸せなのはずっと変わらないけれど、私達には子供がいなかった。

「子どもが生まれたら一ヶ月に一度はイベントしよう」

結婚したての頃、朗は家族で遊ぶ計画を頭の中で描いては、楽しそうに話していた。けれど、私はその夢をなかなか叶えてあげることが出来ずにいた。私の体に少々不具合があるらしく、基礎体温が安定しないのだ。その事で私は、時々激しく落ち込んだ。でもそんな私に、朗は決まってこう言った。

「子どもを産めるかどうかなんて関係ないんだよ。俺は心から愛せる女と結婚したいと思ってた。そしたら皐月がいたんだ。一緒になろうと思えたのはおまえしかいないんだよ」

そして朗は、他人から見たらきっと大袈裟に思われるくらいの真剣な眼差しでこう続けるのだ。

「俺達夫婦がまず内田家の基盤だろ？子どもが出来たら家族は増えるかもしれないけど、それだけの事なんだよ。夫婦だけだって家族は家族なんだから。子どもがいようがいまいが関係ない。俺と皐月は、じいちゃんとかあちゃんになっても仲良しでいるんだからな」

朗はこう言いながら、私の沈んだ気持ちが晴れるまで、いつも根気良く私を励ましてくれた。そして、その朗の言葉を耳にする度に、私の涙腺は簡単に緩むのだ。

「おいおい、泣くなよお」

涙に弱い朗は慌てて私をしっかりと抱き締めると、私が泣きやむまで癖のある髪をずっと撫で続けてくれた。そのおかげで私は、暖かい毛布に包まれているような気持ちになり、心の安定を取り戻す事が出来るのだった。

夜がきた。

「皐月、そろそろベッドに……行く？」

行為の前の朗は、全くもってムードがない。わざとおちゃらけて私を誘うのだ。でも、そんな私もニタニタ笑って、「うん」と答える。これから二人で遊園地にでも行くようなノリだった。

二人して、パジャマのまま布団の中に潜り込んだ。そうになると状況は一変し、私達を取り囲む空気は、大人の世界にがらりと様変わりした。

朗が、穏やかな瞳で私を見つめた。私は一瞬だけ朗と目を合わせたが、照れくさくてすぐに彼から目を逸らした。その代わりに、私は朗の唇にそっと触れ、そこにいっぱい詰まったふわふわの愛を自分の指で確認した。

「朗……だいすき」

そう告げながら、朝とは反対に私から唇を合わせた。それから私は、朗の心が知りたくてすぐに唇を離し、朗との間に隙間を作った。すると朗は、その空間を埋めるかのように何も言わないまま、軽いキスを繰り返し私にくれた。

本当は朗にも、「好きだよ」と言ってほしい……私は、その想いを一生懸命唇に込めながら朗にキスをした。でもやはり、朗に私の心の中までは伝わらなかったようだ。

「臯月、脱いじゃえ」

朗の口から発せられた言葉は、私が求めていたものとはかなり違っていた。それでも私は機嫌を損ねる事なく、朗の言う通りにパジャマのシャツとズボンを脱いだ。朗が私の事を好きだという気持ちは、彼の全身からあふれ出ているのだから、その思いを彼は口に出さなくてもいいのだ……私はパジャマを脱ぎながら、自分にそう言い聞かせていた。

下着はいつも朗に外してもらっていた。この瞬間は私にとって、結婚して五年経った今でも、なんとなく気恥ずかしいことだった。

そのあと、朗の前にさらけ出した私の素肌は、彼によって優しく愛撫された。そして、初めは控えめだった二人の息使いは、徐々に激しく同調していった。やがて、私は身も心も蜂蜜のように溶かされ、呼吸の乱れが頂点に達した。それから少し遅れて、朗も動きを止めた。

「はぁ、果てた……」

朗は、そう言いながら私の隣りに寝転がると、「ん」と言って私に向けて腕を差し出した。そして目を細めながら、「これでばっちりだな」と言った。

私は、朗の腕に頭を乗せると彼の方に体を向け、まだ静まらない呼吸のせいで上下している朗の胸に手を添えた。

「うん、これでばっちり」

私はそう答えながら、朗に微笑みを返した。と同時に私は心の中で、今度こそ彼の赤ちゃんを身ごもる事が出来ますように……と、誰にとでもなく祈っていた。

『あの日』から約半月が経過した。正確には、『あの日と、その次の日と、その次の次の日』から半月が経った、と言うべきか。そして、『あの数日間の行為』の結果の確認可能になる日を、私は毎日、カレンダーと睨み合いをしながら待っていた。

「何日も続けてエッチしたから、俺のが薄くなってて効果が期待出来ないかもよ」

居間でくつろいでいた朗は、私に過剰な期待を持たせない為に、あくまでも慎重な態度をとった。そんな朗の言葉を、私はあいまいな笑みを浮かべながら受け止めた。それから忙しなく夕食の後片付けを済ませると、寝室のタンスの上に置いてあった救急箱をその場に下ろした。

「もう少し待った方がいいんじゃないのか？」

箱の中をがさごそと探っている私を朗がたしなめた。

「だって、予定の生理開始日の一週間後から検査できます、って書いてあるんだよ」

妊娠検査薬の入った箱をようやく見つけ出した私は、朗に検査の同意を得る為に、箱の側面に書いてある文字をしゃきしゃきした声で読み上げた。そして、立ち上がって朗の傍まで行き、彼の顔の十センチ手前まで箱を近づけて、その注意書きを見せた。

朗は律儀に寄り目をしながら箱の文字を凝視し、結局「近いよ」と文句を言うと、私から箱を取り上げた。それから朗は、少し厳しい表情をしながら私に訊いた。

「おまえ、今、生理予定日の何日後なんだよ」

「五日後」

私は予測できる朗の反応に、少しびくびくしながら小声で答えた。

朗はふうっと一回ため息をつく、「臯月、ちょっとここに座って」と、自分が座っているソファの横の空いているスペースをとんとんと叩いた。

「五日後っていうのは、一週間後とは違うんじゃないのかな？」

朗は私の目をじっと見据えると、ゆっくり丁寧に諭した。二つ年上というだけで、私を完全に子供扱いしている。そんな朗に私は少々カチンときた。素早く朗の方を向き、ソファの上に正座すると、私は口調を尖らせながら彼に反論した。

「そんなのわかってるよ。でも高温期が十九日間も続いているんだよ。絶対に確実だって。いつもだったらとっくにヒュ〜ドロドロドロって、あっという間に低体温になって生理が始まっちゃうんだから。生理痛のする辺りが何となく重い感じがするし」

「臯月……」

朗は眉をひそめながら、妊娠を信じきっている私を見つめた。

「子どもなんていないんだよ、俺は」

望んだ結果ではなかった時の私の酷い落ち込み様を、これまで散々見てきた朗だった。でも私は、心配してくれている朗の気持ちに感謝しつつも、今回だけは譲れないと思っていた。

私はとりあえず、ソファから下りて寝室に行き、検査薬の入った箱を救急箱の上に置いた。そして、キッチンに行って冷蔵庫の中のミネラルウォーターを一口飲んだ後、テレビを見ている朗の目を盗み、こっそりと検査薬を手に取りトイレに持ち込んだ。

私は、下着を膝まで下ろして便座に腰掛けると、ドキドキしながら検査薬の封を切った。それから検査薬を袋から取り出し、しっかりと右手に握りしめながら、キャップを外して指定の場所に尿をかけた。そしてキャップを締め、便座に腰掛けたまま尿が染み込んでいく様を見つめていた。陽性ならば、検査薬の中央にある小窓に赤いラインが浮き出るはずだ。絶対、陽性！ 私は祈りを込めて、心の中で何度も叫んでいた。だが、実際数分間の待ち時間がとてつもなく長く感じられていた中で、ダメかもしれないと弱気になりかけた次の瞬間、今までずっと浮き出る事のなかった赤い縦のラインが私の目に飛び込んできたのだ。

「朗！！！」

私はトイレから、宝くじで三億円でも当たったような素っ頓狂な声で朗を呼んだ。その時、検査薬を持つ私の手は小刻みに震えていた。朗は私の興奮した声に驚き、テーブルに足の小指を思い切りぶつけながら、大慌てでトイレに駆け込んできた。

「な、なんだよ、大きい声出して。イテテテ……」

私は、顔をしかめながら足を擦っている朗の腕を掴み、勢い良く揺らしながら言った。

「朗！陽性だよ！私、妊娠したよ。赤ちゃん出来たんだよ！」

朗は足を擦る手をぴたっと止め、痛みのせいで歪めていた表情を一転して明るくさせた。そして、陽性反応を示した検査薬を私から受け取りながら言った。

「どれどれ……ああ、ホントだ！やったじゃないかあ。やっと俺達の子供が出来たんだな。そっかそっか、偉いぞ、皐月！」

まだ生まれてもいないのに、もう出産した後の事のように朗は興奮している。それから朗はおもむろに、私のお腹を愛しそうに何度も撫でた。

幸せそうな顔をしている朗を、私もまた、幸せな気持ちで見つめていた。しかし、その時ふと、ある事が私の脳裏を過ぎた。検査薬の注意書きに、『間違った判定が出る場合もあるので、必ず医師の診察を受けてください』と書いてあったような気がしたのだ。

私は、舞い上がっていた気持ちがすーっと消えていくのを感じた。そして、お腹に頬を寄せて「早く出てこいよお」と口走っている朗の肩に、私はそっと手をかけた。すると朗は、もう子どもに対面でもしたような満面の笑顔で私を見上げた。

その朗に向かって、私は無表情でぽつりと呟いた。

「私、妊娠してないかもしれない」

「な、なんだよ、それ。陽性だったんだろ？妊娠してるってことだろ？」

妊娠を否定した私に、今度は朗の方が検査結果の信憑性を強く主張した。

「そうなんだけどね。ちゃんと病院で診てもらわないと、この検査薬だけじゃ正確な判断は出来ないんだって。異常妊娠ってこともあるし」

「異常……妊娠？」

更に異常という尋常でない言葉を耳にした朗は、表情を曇らせ戸惑いを隠さなかった。

「そう。子宮外妊娠とか、胎状奇胎とか」

私は暗記するほど読み込んだ、妊娠に関するハウツー本に書いてあった事を言った。

「なんだか難しくて、よくわかんないんだけど」

朗は完全に混乱している。

「じゃ、ちょっと本で説明してあげるね。とにかくトイレから出るよ」

私が下着を膝まで下ろした状態であったことに、朗はこの時ようやく気がついて、「おお、早くパンツ穿け」と言って、トイレの入り口から一步退いた。私は朗が占領していたスペースに立ち上がり下着を穿き、トイレの水を流して手を洗うと、その一連の動作を見ていた朗に「お待たせ」と合図をした。

居間に戻り、二人で並んでローソファに座った。そして、私は自分の膝の上に『妊娠と出産』という本を広げた。

「ほら、ここに絵が載ってるけど、受精卵が子宮の正しい位置じゃなくて別の場所に着床してるでしょ？卵管峡部とか卵管膨大部とか卵管漏斗部、卵管間質部、それから卵巣や子宮頸管に着床することを子宮外妊娠っていうの。胎状奇胎は胎盤を作るじょう毛組織の一部が異常に増えて、ぶどうの粒のようになって子宮の中を満たして赤ちゃんを吸収しちゃうんだよ。恐ろしいよね」

私が指差したところに、丸い風船のように膨らんだ子宮いっぱいぶどうの粒がひしめきあっている挿し絵があった。それまで本を覗き込みながら私の説明を聞いていた朗は、ぶどう入りの風船を見た瞬間、腕に鳥肌を立てながら即座に目を逸らした。そして、「もういい！もう本を閉じてくれ！」と言って、視線を外したまま腕だけ伸ばし、開いていた本を自分でバタンと閉じた。でも、私は構わずに続けた。

「でね、卵管に着床しちゃったとするじゃない。知らずにそのままほっとくと、胎児が成長して卵管が破裂しちゃうんだよ。お腹に激痛が走るから知らずに過ごすことはないだろうけど。あと、ぶどうがいっぱいになっちゃったら、少しも残さないようにきれいに取り除かないと、じょう毛ガンになるかもしれないんだって。どうする？私がガンになっちゃったら」

私が最悪の事態を次々と並べ立て、最後に『ガン』という病名で追い討ちをかけたものだから、朗は私を睨むように見ながら怒った口振りで言った。

「そんなこと言ってないで、明日必ず病院に行けよ。あ、俺もついて行くから」

「ついて行くって会社は？明日は休みじゃないでしょ？」

「いいんだ。明日は買い取った車を引き取りに行くだけで、他の奴に頼めるから。だから明日、

俺は風邪を引く。そう決まってるんだ」

そう言うと朗は、すくっと立ちあがり、落ち着かない様子でキッチンに行った。

彼は、小さいながらも自分で経営している中古車販売店の店長なので、自分のスケジュール調整は自由に出来る。だが、本当の病気でもないのに、突発的にこんなに安易に休んでもいいものなのだろうか、私は少し不安に思った。

「いいの？」

私の問いに答える事なく、朗はそわそわしながら冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、コップにもつがずにそれを一気に呷った。そして、壁にかかっている時計を見遣ると、「明日は六時に起きて、八時に家を出て、病院に行って……」と、ぶつぶつ独り言を言い出した。

私は、自分の夫の言動を見ながらふーっと息を付くと、ソファに深く座り直した。そして、妊娠の有無について私以上に動揺している朗を見ながら考えた。幸いにして正常な妊娠だったとしたら、これからの十ヶ月間、朗はちょっとしたことにでも過敏に反応し、神経をすり減らし、私を壊れ物のように扱うのではないだろうか。なんだか空恐ろしいような、でも嬉しいような、私はそんな気持ちだった。

どちらにしても、明日病院で検査してみないことには何も始まらないのだ。今日、出来る事は何もない。だから私は、部屋中うろうろしている朗を一人残し、お風呂に入ることにした。

## 尿検査

---

診察受付時間の十分前に、私達は家から車で五分の所にある産婦人科に着いた。駐車場が狭いので私は車から先に降り、バックさせながら車を駐車スペースに入れていた朗を脇で見ていた。

病院玄関を入れて正面にある受付で、私は保険証と診察券を出した。以前、不妊外来に来た事があったので、ここの診察券は持っていた。

「あの、妊娠検査をして頂きたいんですが……」

私は、尿検査はすぐにするんですか？ それとも長い時間待ちますか？ それなら少し外出したいのですが……と、この後に尋ねたい事をたくさん用意していた。それなのに、受付の人は私にその隙を与えてはくれなかった。

「じゃあ、尿を取ってきてくださいね」

受付の人はそう言いながら、事務的且つ迅速に紙コップを差し出した。私は声に出せなかった質問事項を飲み込み、少しうろたえながら紙コップを受け取った。

「わかりました！」

曖昧な態度を取っている私の代わりに返事をしたのは朗だった。それから朗は私の腕を掴み、意気揚々とトイレの前まで私を引っ張っていった。

「ほら、頑張ってくださいよ！」

朗は私の正面に立つと、腕から離れた手を私の両肩に乗せて言った。私は朗の妙な励ましに眉をひそめながら、「尿をコップに入れるだけなんだけど……」と、朗を上目遣いに見ながら呟いた。しかし朗は、外部からの音は一切聞こえないといった様子で、私の体をくるりとトイレ側に向けると、

「よし、行って来い」

と、私の背中を軽く押した。私は、頑張らなくてオシッコくらいで出来るよ、と心の中でぼやきながら女性トイレに入っていった。ところがいざ尿を取る時になって、本当に頑張らなくてはならない事態が起きたのだ。

この病院は来院者が多く、いつも非常に待ち時間が長い。尿検査をすることは頭にあったのだが、また例によって二時間近くは待たされるだろうと私は勘ぐっていた。だから、病院に着いてから飲み物を飲むくらいの余裕はあるだろうと、私は家を出る直前にトイレを済ませてきてしまったのだ。そのせいで、今、全く尿意が感じられない。便座に座りながら、私は茫然自失となった。こればかりは朗に頼めないし、どうしよう……と、悩んで悩んで悩んだ揚句、私は空の紙コップを持って、仕方がなくトイレから出る事にした。

「朗……」

私はトイレの出入り口から顔だけ覗かせ、情けない声で朗を呼んだ。

「な、なんだよ。どした？」

私のあまりにも弱々しい声を聞いて、朗は待合室の椅子から私の所に駆け寄って来た。

「どうしたの？ 具合でも悪くなった？ ほら、ここに座って」

朗は今にも倒れそうな病人を扱うように、私の体を後ろから両手で支えて、一番近くの長椅子に座らせた。

「ちょっと待ってて」

そう言う朗は、きびすを返し、看護師さんと呼ばれに行こうとした。私は朗の敏捷な動きに焦り、「違うよ、朗！」と、思わず大きな声を出してしまった。

朗は驚いて一瞬動きを止め、くるりと方向転換すると、しのび足で私のところに戻って来た。そして、私の口に自分の人差し指を押し当て、「シーッ！」と言いながら私を制した。

「おまえ元気じゃないか。何が違うんだよ。死にそうな顔をしてトイレから出てくるから心配すんだろ」

「だって朗が私の話も聞かないで、どんどん……」

私は、朗の少し怒った口調と尿検査が出来ずにいる不安で、半分泣きそうになっていた。そんな私を見て朗は、いつものように少し慌てた。

「わかったわかった、ごめん。それでどうしたんだよ。トイレで何かあったのか？」

そう言いながら朗は私の横に座ると、私の顔を心配そうな目で覗き込んだ。

「あのね……」

私は、事の成り行きを朗に切々と説明した。

「なんだよ、そんなことか。だったらお茶買ってきてやるよ。待ってな」

事情を理解した朗は拍子抜けしながら、病院の入り口近くにある自動販売機にお茶を買いに行った。自分の分と私の分とを二本買って戻ってくると、再び私の隣りに座りながら言った。

「こんなことであんなに弱々しい声を出してたのか？」

朗に訊かれ、私は気がかりなことを胸に秘めながら、それを彼に告げた。

「検査の前の段階で引っかかっているなんて情けなさ過ぎて、朗、怒るかなあって思って……」

私は早く正確な情報を彼に知らせたかった。それなのに、情報を得るための方法を施行できない状況に陥っている。あまりにもお粗末過ぎて、朗に呆れられるだろうなと私は思っていた。しかし、それは私の取り越し苦労でしかなかった。朗は私をまっすぐに見つめると、声のトーンを低くして言った。

「臯月は俺が恐いか？」

私は黙ったまま、慌てて首を横に振った。

「じゃあおびえる事ないだろ？ 今日、もし検査が出来なくたって俺は怒ったりしないよ。でも俺が臯月をトイレに追いやったからプレッシャーかけちゃったんだな。ごめんな」

朗に謝られて、私はさっきよりも更に彼に申し訳なく思った。

「朗は早く検査の結果が知りたいよね。それなのに、家でトイレを済ませてきちゃった私が悪いんだ……」

私がそう言いながら俯くと、朗は私の頭を撫でながら軽く微笑んだ。

「ほら、お茶飲んで。その間に看護師さんに言ってきてやるから」

朗は「看護婦さんに……」から後の言葉に何やら含みを持たせて言った。私は朗の言葉を聞き

、沈んだ気持ちにストップが掛かった。彼のいたずらっぽい口調は明らかに何かを企んでいる。

「何を言うの？」

私は朗に訊いてみた。すると朗は案の定、とんでもない事を口にした。

「おしっこ出すのに、ちょっと時間がかかりますって。アハハ」

私は、顔が一気に火照るのを感じた。そして、ニヤニヤ笑っている朗を思い切りひっぱたいた。頼れる旦那様だなと安心しきっているといつもこうだ。そう思いながら私が思い切り膨れ面をしていると、背中越しに誰かが声を掛けてきた。

「急ぎませんからね。出そうになったら取ってくださいね」

私達の会話を聞いていた看護師さんだった。私は恥ずかしさで体全体が熱くなった。そんなことを知ってか知らずか、朗はその看護師さんに向かって飛び切りの笑顔を作ると、「わかりました！」と、優等生のように答えた。

## 胸の痛み

---

無事に尿を採取してから一時間後、私は診察室に呼ばれた。そして、先生の前にある丸い回転する椅子に腰掛けながら、不妊相談をしていた時から付けていた基礎体温表を担当医である田山先生に渡した。すると田山先生は、ずっと高温である最近の私の体温を確認し、尿検査の結果を告げた。

「たぶん、妊娠でしょう。内診してから詳しく話すから」

そう言われて、私は何気なく後ろに立っていた朗の顔を見上げた。朗は私と目を合わせると、声を出さずに笑顔で小さくガッツポーズをした。

「下着を取って内診台に上がって下さい。先生が来るまでちょっと待って下さいね」

朗のガッツポーズを受けて両手でピースをしている私に、看護師さんは、「よかったですね」の言葉を付け加えながら笑顔で促した。

診察室のすぐ隣り、壁を一つ隔てたところに内診室があった。内診室にも付いて来ようとした朗に、看護師さんは内診室の扉の横に置いてある椅子で待つように言った。すると朗は、「え？あ、わかりました……」と不服そうに立ち止まり、そこにあった背もたれのない椅子に腰を下ろした。

私は内診室に入って靴と下着を脱ぐと、腰掛ける所から下がざっくり切れている診察台の上に背伸びをしてお尻を乗せた。そして体の向きを九十度回転させて、内診台の下方両側にある、カップのような窪みに足を乗せた。すると看護師さんは、足を広げた無防備な格好の私の腹部にタオルを掛けながら、診察しやすいように私のスカートをたくし上げた。

診察する準備が整うと、田山先生が内診室に入ってきた。先生は、私の臍の上辺りに垂直に小さなカーテンを降ろし、腹部のタオルを取って診察を始めた。臍の中に指を入れてもう一方の手をお腹の上に置き、両方の手の間にある子宮や卵巣の位置、大きさ、硬さを診た後、棒状の超音波の機械を臍に挿入してお腹の内部をモニターに映した。それから、そのモニターの画像を見ながら、「赤ちゃん、元気ですよ」と穏やかに言った。

先生は臍の上のカーテンを開け、私にもモニターを見せてくれた。その時、朗が看護師さんに呼ばれて内診室の中に入ってきたのが見えた。

「この黒いのが羊水の袋。今、五ミリくらいの大きさだね。この丸いのは子宮。子宮外妊娠ではありません。流産する事もないでしょう」

田山先生は、私と朗に向かって変化しつつあるお腹の中の説明を続けた。

先生の話に大きく頷きながら、正常妊娠とわかった私は顔が緩みっぱなしだった。その私とは対照的に、朗の顔色はなぜか青ざめていた。

田山先生は最後に、今度の来院の日取りを決めながら、「妊娠しなかったのは卵管が詰まったのかな。レントゲン撮った時、造影剤を卵管に通したでしょ。その検査だけで卵管の通りがよくなって妊娠する人もいるから。今度は一週間後に来て下さい」と、言った。

不妊外来で受けた卵管疎通検査。その中の子宮卵管造影法というのは、管を臍から挿入し、外

子宮口から造影剤を注入しながらレントゲンを数枚取り、卵管が根元で詰まっているかどうかを調べるといふものだ。これがまた非常に苦痛を伴い、造影剤注入時、とてつもない痛みが走る。私は検査後もしばらくの間は気分が悪く、横になったまま起き上がれなかったくらいだった。

「あの検査をやった甲斐があったんだよね、朗……朗？」

会計を待っている間、私は少し前からやけに無口になった朗に話しかけた。朗は正面を向いて何やら考え込んでいた。普段は間髪いれずに喋っている人が黙り込むと、異様な威圧感がある。だから、私はそれ以上何も言う事が出来なくなってしまった。

病院を出て車に乗り込んでからも、朗はずっと言葉を発しようとしなかった。

「朗、どうしたの？ 嬉しくないの？ 赤ちゃん出来たんだよ」

すると朗はゆっくり私の方に体を向け、普段はあまり見せない怖い顔をした。

「おまえ、あの病院やめろ」

「ど、どうして？」

「お腹の赤ん坊を見るのに、どうしてあの台にのらなくちゃならないんだ」

私は朗の言っている意味がわからなかった。

「あの台って内診台のこと？」

「そうだ」

「内診台に乗って赤ちゃんの様子を見たんじゃない。何、分かりきった事、聞いているの？」

「そうじゃない！」

「そうじゃないって、じゃあ、どういうことよ。」

埒が明かない朗に、私はだんだん腹が立ってきた。

「普通、赤ん坊を見るときって、お腹に機械当てて超音波で見るじゃないか」

「だから？」

「だからあ……」

ここまで話すと、朗は急に口籠り始めた。

「だから、どうしたの？」

私が訝しげに訊くと、朗はさっきまでの勢いとは裏腹に何やら言いにくそうに呟いた。

「なんでおまえだけパンツ脱いで腹ん中見てもらわなくちゃいけないんだよ。おまえもお腹の上から診てもらえよ。嫌だよ、俺。相手が先生とはいえ、検査の度に下から見られるのは……耐えられない！」

朗は顔を真っ赤にしながらかう言った。私は朗が今日の診察を見て心を痛めていた事に、この時始めて気がついた。同時に、そんな朗をととても愛しく感じた。こぶしを握りしめ、やり場のない怒りを抑えている朗の手に、私はそっと手を重ねた。

「最初のうちだけだよ。ここの病院で出産した佐藤さんが、三ヶ月目位からお腹にエコー当てたって言ってたし。私も抵抗あるよ、内診って。でも、最初だけだから……」

「最初だけか？」

「そう、最初だけ」

「最初だけ我慢すればいいんだな」

「うん」

「……わかった。わかったことにする。まだここんところには引っ掛かってるものがあるんだけど」

そう言うと朗は眉間に皺を寄せたまま、自分の胸を拳でポンポンと叩いた。

妊娠確定の次の日から、朗は私に、「外を歩くときは転ばないように気をつけろ」だの、「冷えないように腹を出して寝るなよ」だの、妊婦が気を付けなくてはならない注意事項を思いつくまま口にした。初めの予想通り、朗は私よりも遥かに神経質になっていた。私は朗の気持ちに感謝しつつ、全部をまともに聞いていると朗の神経質が伝染しそうだったので、半分は右から左へと聞き流した。

朝、朗を仕事に送り出した後、洗濯物をベランダに干しながら空を見上げると、真っ青な空に、何も混ぜていない絵の具の白で描いたような雲がぼつりぼつりと浮かんでいた。

「いい天気だなあ。散歩してこようかな」

私は洗濯籠に残った朗のTシャツを干し終わると、スウェットからジーンズに置き替え、薄く化粧をした。そして朗に言われた通り、低いサンダルを履いて玄関を出た。

近くの小学校の隣にある図書館にでも行こうと街路樹の下を歩き出した私は、「妊娠したら『妊娠届け出書』を出さなくてはならない」と、本に書いてあったことを思い出した。その届けを出すのと憧れの母子手帳がもらえる。でも、早々に母子手帳をもらってしまい、お腹の子どもに万一のことがあったら落ち込むのではないかと悩んだが、とりあえず用紙だけもらっておいても損はないだろうと市役所に出向いた。

私は総合窓口課の前に立ち、カウンターから一番奥にいた薄茶色の事務服を着た五十歳位の男性に声を掛けた。

「すみませーん」

男性は首だけ動かしこちらを向くと、よいしょと腰を上げた。

「なんですか？」

こちらに近づきながら、男性は怒っているような口調で言った。予想だにしなかった男性の尖った態度に、ただ用紙を受け取りに来ただけの私は少し萎縮してしまった。でも他の用事を思い浮かべる事も出来ず、恐る恐る「妊娠届けの用紙をいただきたいんですけど……」と告げてみた。すると男性は、妊娠に関して好意的に受け取れる心持ちだったらしく、表情を和らげて私に尋ねた。

「今、書いていきますか？」

私はホッとしながらも、万が一の事をやはり考えておいた方がいいと思い、「いえ、印鑑を持ってこなかったので用紙だけください」と愛想笑いをしながら言った。

ところが、すんなり用紙を手渡されると思っていたのに、この男性は、また私が考えもしなかった事を言った。

「拇印でいいですよ」

想定外の言葉を聞いてキョトンとしている私に、男性は届け出用紙とティッシュをごっそり手渡した。そして、「インクがついたらこれで拭いてください。そちらの台で書いてくださいね」と私の後方を指差した。

「は、はい」

私は言い切られた形で用紙とティッシュを持ち、カウンターから三步下がった所にある記入台に移動した。それから数分の間、こんなに安易に書類を提出してしまっていていいものかと、用紙に記されている記入欄を凝視しながら自問自答していた。しかし、これだけすんなりと母子手帳を交付される経緯を辿っているという事は、順調に妊娠が進むという運命を物語っているのかもしれないと、私の得意な「運命」にかこつけて自分なりに納得し、ペンを取った。

（名前は、内、田、皐、月と。生年月日は、昭和四十七年十月二十日。年齢は三十一です。それから住所は……）

心の中で記述する事を一つ一つ確認し、私は緊張しながらペンを走らせた。そして、ある項目に来たところで、私は唐突に文字を書く手を動かさなくなった。『医師又は助産婦の診断』という欄で、その施設名、所在地、氏名とあるのだが、私は田山先生の下の名前を知らなかった。診察券に病院の所在地は記されているが、担当医師の名までは書かれていない。私は、どうしようと思いながらロダンの『考える人』にでもなったように、台に肘を付きながらじっと用紙を見つめていた。

そんな私の様子を不審に思ったのか、用紙をくれた男性がカウンターから出て私の傍らに立った。

「ご気分でも悪いですか？」

私は男性の声にハッとしました。それから慌てて顔を上げ、「いえ、大丈夫です」と、小刻みに頭と手を横に振った。

私が元気そうに笑っているのを見ると、男性は、そう？ と安心した様子で自分の席に戻っていった。私は男性の後姿を見ながら、ふいに声を掛けられた拍子にドキドキした心臓を押さえながら息を整えた。しかし安堵している場合じゃないと思い立ち、去っていく男性に向かって焦り気味に声を掛けた。

「あの、すみません」

私は普段、わからないことを聞くという行為を極力避けようとする癖があった。どうにかして自分で調べればわかる事を、わざわざ人の労力を費やしてまで聞いてはいけないと思ってしまい、つい躊躇してしまうのだ。

「どうなさいました？」

振り返りながら男性は答えた。

「あの、この医師の名前、苗字しかわからないんですけど、どうしたらいいですか？」

躊躇いがちに私がそう尋ねると、男性はいとも容易く、「苗字だけでいいですよ」と言った。

「そ、そうなんですか？」

大した問題ではなかった。拍子抜けしながら田山先生の苗字を書き、最後の欄、『妊婦の氏名』のところに自分の名前を記入して、いよいよ緊張の一瞬を迎えた。

私は妊娠に辿り着くまでのいろいろな思いを込め、人差し指にたっぷりインクをつけた。そして、名前の横の押印の欄に、真っ赤に染まった指を力強く押し当てた。それは、欄からはみ出ることなく、印の文字の上にとっかりと置かれている。（よし！）と満足しながら、私は用紙から指をそっと離れた。

その時。私は人差し指を用紙から八センチ浮かばせた格好で、再びフリーズする羽目に陥った。印鑑とは違い、インクのついた指を強く押し付けるとどういふことになるのか、私はこの時やっ  
と気が付いたのだ。

(指紋が、ない)

そこには、私の指先より一回り大きな黒い丸が縦に伸びて描かれていた。その黒い丸は間抜けな私を象徴しているかのように、てかてかと黒光りしていた。

今朝、布団から這い出てきた時はなんともなかったはずだった。朗を送り出した後、いつものように洗濯を済ませ、部屋中に掃除機をかけ、少し休憩しようとしてソファでうたた寝をした後、私が妊娠に関して一番恐怖だった事に襲われた。眠りから覚めて起き上がろうとした瞬間、胃がムカムカし始めたのだ。

私は頭が痛いとか歯が痛い等の痛みには強いが、吐き気のある状態にはめっぽう弱く、嘔吐するという行為が何よりも苦手だった。それなのに悪阻となれば数ヶ月間、人によっては出産するまで、この気持ちの悪さと戦わなければならないと聞いた事がある。こうなると悪阻というものは、私にとって拷問と言う他の何物でもない。

私はソファに倒れこむと、体内の『ムカムカ』だけに神経を集中させた。大抵の人は、散歩をするとか、好きな本を読んだりして気分の悪さを紛らわせる事が出来るのだろうが、私には至難の業だった。体の中の仇と向き合っている時に、他の用事など出来る訳がない。横たわって、気分の回復をひたすら待つ事しか出来ないのだ。だから、体を動かすとムカムカが酷くなると信じている私は、朗が帰って来るまでの数時間、ずっとソファにへばりついてた。

「ただいまー！ 皐月、いないのか？ 買い物かな」

空に星が一つ二つ見え始めた頃、朗が仕事から帰って来た。私の姿が見当たらなかったせいか、朗は窓から差し込む外灯の明かりを頼りに直接寝室へ行った。そして、クローゼットからTシャツとジャージを出して着替え、居間に移動し明かりをつけた。

「うわっ！ 皐月、いたのか」

オットセイのように横たわり、目だけをパッチリ開けている私を見るや否や、朗は大きな声を出して極端な驚き方をした。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

いつものごとく、朗は大袈裟な位に心配した。

「気持ち悪い……」

否定し難い私の一大事なのだが、詳しく説明する気持ちの余裕がない。なので、そのひと言で苦しみを分かってもらいたかったのだが、私の尋常でない様子に朗は動揺して事態をうまく飲み込めないらしい。

「なんか変なもん、食ったか？」

「違う」

「え？ じゃあ風邪か？ 病院には行ったのか？ その調子じゃ行ってないな。行かなきゃダメじゃないか」

朗は一人で先走っている。

「違う、違う」

妊娠してて気持ちが悪くと言ったらあれしかないでしょうと、私は少々じれったくなってきた。でも話す為に腹筋を使うと吐き気が増大しそうだったので、多くの言葉を発する事が出来なかった。

「妊娠してるっていうのに大変じゃないか。ほら、今からでも行こう、病院」

朗はそう言いながら、事もあろうに私の体を抱き起こして玄関まで連れていこうとした。私は急な体勢の変化に頭の血が一気に下がり、心臓の鼓動が早くなると同時に冷や汗を掻き始めた。そして、それまで堪えていたものが一気に込み上げてきて、朗の手を振り解くと急いでトイレに駆け込んだ。

朗は一瞬呆気にとられていたようだったが、トイレで吐いている私の様子に気づき、慌てて背中を摩りにきた。

「大丈夫か？ やっぱり、病院に……」

まだわかっていない朗に、吐いた事で少し楽になった私は、「つわりだってば」と、横目で彼を見据えながら低い声で言った。

「つわり？ つわりって妊娠した時に気分が悪くなる奴か？」

「そう」

「だったら早く言えばいいのに。もう大丈夫か？ 立てるか？ おまえ布団に行って寝ろよ。あとは俺が全部やるから。何も心配するな。ほら、つかまって」

頼りになるのかならないのか、朗は悪阻とわかった途端、いつもにも増してマメマメしく私を解放し始めた。

「皐月、夜は何が食べたい？ 今日の夕飯は何にしようか」

仕事着に着替え、トーストを頬張りながら、朗は布団から出られない私に向かって声を掛けた。

私がお米の炊ける匂いを敏感に感じられるようになってから、朗は料理から掃除から洗濯までのいっさいの家事を引き受けてくれていた。

というのは先日、スーパーの惣菜売り場の匂いで気分が悪くなり、店の外へ出たまでにはいいがそこで動けなくなってしまったという事があった。そこへちょうど仕事から帰ってきた朗がその私を見つけ、血相を変えながら私を抱えて帰り、もう何もしてなくていいと、私からいっさいの家事を取り上げたのだ。

それ以来その好意にどっぷり甘えている私は、この朗の問い掛けに、「うーん……アイスクリーム」と、答えた。

「アイスね、冷たい物の方が食べやすいよな。他には？」

「他には、チョコレート」

「あとは？」

「あとは、リッツ」

「それと？」

「それと、ゼリーとヨーグルト」

おやつ類ばかり要求する私に、朗は一瞬私を見据えて何か言いたげな顔をした。

「デザートもいいけど、おかずになりそうなもので何か食えるものないか？」

そう言われても、胃のもたれとムカムカに私は四六時中襲われている状態なのだ。

しかも、自分で何が食べられるのか、食べてみるまで全くわからない。同じ物でもその日によって食べられたり食べられなかったりする。今、朗がした質問が一番困るのだ。私は朗と同じような顔で、彼を見据え返した。

「まあいいや。さっぱりしたものの方がいいんだよな。適当に作ろう」

私と目が合って答えが出ない事を悟ったように、独り言を呟きながら玄関を出ていった。

一人残された私は、自分の体に起きている『事件』について考えていた。

お菓子など本当は食べたくなかった。しかし、あまり後味を気にせず口に出来るものがお菓子しかないのだ。すでに飽き飽きしているのだが、胃を空にすると途端に吐き気に襲われる。だから仕方なくお菓子を食していた。私はこんな状態がいつまで続くのかと思うと、ほとんど憂鬱な気分になった。

「ただいまー。今日はキャベツとなすの炒め物。あっさりとした味付けにしてやるから待ってろな」

買い物から帰ってきてキッチンに立つと、朗はさっそく買い物袋から材料を取り出した。一人暮らしの経験もある朗は、夕食の準備を手際良く進めていく。

まるで若妻のようにいそいそと調理をしている朗を見ながら、私は体調が優れない中にも幸せ

で満ち足りた気持ちになっていた。

ところがその時、突然、骨盤の右上辺りがきりきりと痛み始めた。

一時的なものだろうと、ソファで仰向けに寝たり、右を向いたり左を向いたりしながら、痛みが弱まりそうな姿勢を探した。しかし、痛みはいつこうに治まる気配を見せないどころか、だんだん強まっていく。キッチンにいる朗を呼ぶにも痛くて声が出せない。

私は脂汗を掻き、お腹を抱え込みながら荒い呼吸をしていると、食器を並べに来た朗がようやく私の異変に気が付いてくれた。

「どうした？ 皐月」

「おなかが痛い」

「大丈夫か？」

「ダメ……」

気弱になりながらその一言だけをやっと告げると、私はもう声を出す事が出来なくなった。その私に朗は、「今、車持ってくるから待ってろ」と言い残し、直ぐ様玄関を飛び出していった。

私はその間に体を引き摺りながら、お金と保険証と母子手帳の入ったショルダーバッグを寢室に取りに行った。出来るだけ早く、病院に行きたかったからだ。そしてバッグを首から提げ、力尽きて寢室でうずくまりながら朗が戻ってくるのを待っていた。

車を家の前に止めて戻ってきた朗は、倒れている私に驚きながら、「大丈夫か。しっかりしろよ」と言って、私を抱き上げた。そして玄関を出て鍵を閉めると、あらかじめシートを倒しておいた助手席に私を寝かせた。

ところが。

車が走り出してからほんの数分後、あの角を曲がると病院に着くという時になって、お腹の痛みが弱まり始めたのだ。

朗はそんな事とも知らず、猛スピードで赤信号になったばかりの交差点を突っ込んでいく。私の方はといえば、そんなに急がなくてもいいよ、と言いついそうになるくらい痛みが落ち着いてきた。そして病院に到着した時、事もあろうに私のお腹の痛みはすっかり消えてしまったのだった。

しまった、またやっちゃったかもしれない。

私は心の中で幼い頃の事を思い出していた。

十歳の頃、就寝時間近くに胃がもたれたような違和感を感じた。私はそれを親にうまく表現する事が出来ず、「お腹が痛い」とだけ言った。

普段あまり不調を訴えない子どもだったので、ただ事ではないと思った親は私を夜間診療に連れて行った。すると、病院に行ったことで安心してしまった私は、胃のもたれが気のせいで済むくらいの程度になってしまった。その挙句、「お母さん達に大事にされてるんだね」と医者に嫌味を言われ、胃腸薬をもらって元気に帰ってきたのだ。

この時と同じように、また周囲の人を巻き込んで病院騒ぎを起こしてしまったかもしれないと私は内心焦っていた。

「妊娠中は心配な事が多いでしょうから、不安なときにはいつでも来てくださいね」

産婦人科の看護師さんは昔の病院の先生とは正反対に、具合の良くなった私に柔和な笑顔を向けてくれた。それから診察室のベッドに横になるように私に促し、先生を呼びに行った。

「妊娠三ヶ月位の際は卵巣からホルモンが出る時期だから、そのせいで少し腫れるんです。よくあることですから、心配なさらずに」

たまたま当直だった田山先生がやってきて、私のお腹にゼリー状の物を塗り、初めてお腹の上からエコーをあてて赤ちゃんを私達に見せてくれた。

「おおー、動いてる！」

朗は私の寝ている脇に座ってモニターを見ながら興奮していた。私がお腹の痛みに振り回された事など忘れてしまったかのようだ。

朗と私の子が、モニターを通して元気な姿を見せてくれている。その横に満足気に笑っている朗がいる。

なんて幸せな風景なんだろう。

そう思いながら、私は腕を伸ばして朗の手を握り締めた。すると、朗はモニターからふと目を逸らし、微笑みながら私の手を暖かい両手で包み込んだ。

妊娠五ヶ月、腹痛もあれから起きる事なく悪阻もようやく落ち着いてきたある日、私に第三の災難が降りかかってきた。

就寝前のひととき、絨毯にべたっと座り込んでお茶を啜り、朗とテレビを見ていた時の事だった。

夕食のボリュームが少々少なかったせい、朗はすっと立ち上がったかと思うと、茶箆筒から煎餅の詰め合わせを出してきた。戻ってきた朗は私の隣に座りなおすと、一枚一枚包装してある煎餅を取り出しては私に差し出した。食欲の戻った私は渡されるままに口に運んでいた。朗もテレビに映っているバラエティー番組を見ながら、煎餅をいい音を立てて食べた。そして二人して声を上げて笑い、私が煎餅を勢い良くかじった次の瞬間、私の口の中に異変が起きた。

「う……」

私は顔をしかめ、口の中の異物を舌で転がしながら確かめていた。

「どした？」

朗は、急に笑うのをやめた私の顔を覗き込んで心配そうに訊いた。私は舌先に当たる煎餅ではない固体をつまみ出し、それを朗に見せた。

「銀歯が取れた……」

朗は取れた銀歯を見ながら、やれやれと言った表情を見せた。私が大の歯医者嫌いだということを知っているからだ。

私はいつも虫歯が痛くならない限り通院しない。実は取れた銀歯の手前に虫歯があるのだが、穴を大きくしないように現状維持に励んでいた。ただでさえ、妊娠中で何を食べても後味が悪い状態が残るのに、歯の治療を受けたりしたらどんな苦痛が待ち受けているかわからない。

そう思っていた矢先だった。しかも、被されていた歯がぎざぎざと尖っていて、舌に当たり痛くてどうしようもない。そのうち舌が炎症を起こしてもっと大変な事態に陥るかもしれない。私はぎざぎざした歯を舌先でなぞりながら、取れた銀歯を恨めしげに眺めていた。

「神様のお告げなんだよ。覚悟を決めて行って来い」

私と違って、歯科通院など何とも無い朗が戒めるように言った。

「やだな……」

私は、なんとか免れる方法はないものかと朗にすがりたい思いで呟いた。

削る際の神経に触った痛さもそうだが、型を取る時に噛ませられる大量のガムが苦痛なのだ。奥歯であるほどそのガムが喉に当たって「おえっ」となりそうになり、固まるまでの一分間が地獄だった。

「子どもじゃないんだから行って来いよ。出産したらそれこそ通院してる暇がなくなるんじゃないか？」

朗はこう言いながらも子供に説得するように私に問いかけた。確かに、出産して一ヶ月位の新生児は、いろいろな菌に晒さない為にもあまり外に連れて歩けないと聞いている。朗の言う通り、出産後は歯科通院をしている余裕などないかもしれない。

「そうだね。わかった。予約する」

私は理屈では納得しつつ、感情では全く受け入れられないまま、翌日歯科に予約の電話を入れることにした。

歯科に電話をしてから一週間が経った。緊急を要しないという事で直ぐに治療してもらえず、一週間待たされた。だけれども歯科通院の為の覚悟を決めるのに、私にとっては都合のいい時間だった。

予約時間までの間、私は家の中を片付けたり、ぱらぱらと雑誌をめくったりして過ごしていた。しかし活字が頭の中に入ってくるでもなく、目に映る写真もそれを認識する脳には届かなかった。

予約まであと四十五分という時、手持ち無沙汰の延長で私はラジオのスイッチを入れた。するとFMから女性DJの早口で軽快なお喋りが流れてきた。

「今日のテーマは、『迫っていること、迫られていること』。何かに迫られている事ありませんか？ 彼女に結婚を迫っているとか、アパートの立ち退きを迫られているとかいろいろとあると思うんですけど、何かありましたらこちらまでどしどしファックスかメール下さいね。お待ちしております！」

このテーマを聞いて私は直感的にひらめいた。今まさに私は歯の治療を『迫られている』。今の状況にぴったりだ。そう思ったら投稿せずにはいられなくなって、私は思いつくまま便箋にペンを走らせ、書き上げると即ファックスした。

そして十分後。

「今日のテーマの迫っていること、迫られていること。ぞくぞくと届いてますねー。まずはファックスネーム、五ヶ月妊婦さんからです……」

え?!……

私はどきっとしながら手元の便箋を見た。私の書いたペンネームは『五ヶ月妊婦』だった。

「『三時十五分に、だいい嫌いな歯医者に行かなくてはなりません。身支度に気合が入りませーん』だそうですね。もう少しですねー。あと三十分というところでしょうか。がんばって行って来て下さいねー」

DJが語尾の度に言葉を伸ばしながら威勢良く私のファックスを読んできた。私は瞬間的に舞い上がった。

「うそー! 読まれちゃった! すごいすごい!」

そばに誰かがいるわけでもないのに、私は声を上げて興奮していた。朗が帰ってきたらすぐに報告しようと、うきうきしながら身支度を整えた。

そうして先程までげんなりしていたことなどすっかり忘れて颯爽と家を出た私は、歯科まで一キロの道程を足取り軽く歩いていったのだった。

七ヵ月になった頃から、ホルモンバランスのせいなのか体質が変わってきた。肌荒れなどした事のない私の手の平はかさかさし、全身の体毛が薄くなってきたのだ。昔から少々ムダ毛に悩んでいたのも「毛」に関しては嬉しい限りなのだが、肌に艶が無くなってしまった事には、皮膚が一気に年を取ってしまったようで悲しかった。

しかしもう一ヶ所、嬉しい変化を見せた部位があった。バストだ。通常八十センチに満たないお粗末な私のバストが、乳帯を買う為に改めて測ったところ、なんと九十センチにもなっていたのだ。

「朗！　すごいよ、見て！　このふくよかな胸。朗ってこういう胸が好きなんだよね」

私は風呂上りのパジャマ姿で得意げに朗に向かって胸を張り出してみせた。妊娠が進むに連れ徐々に大きくなっていった胸ではあったが、実際に数字で出し、大きな変化があった事を目の当たりにして我ながら驚いていた。

「だからあ……別に大きいのが好きとは一度も言ったことはないぞ」

朗は通常の私の胸のサイズに遠慮しているのか喜びを顔に表さなかった。でも朗のこの言葉だけはどうしても信じられなかった。朗はエッチの後はずっと、ゆったりとしながら私の胸を触っている。彼はおっぱいが大好きなはずだ。巨乳とまでは言わなくても、もう少しボリュームのある胸がいいと思っているに決まっているのだ。

「でもさ、今の私のおっぱい、すごくふわふわしてるよ。ほら、触ってみて」

私はここぞとばかりに朗の手を取って自分の胸にあてがった。妊娠以来、乳房の刺激は子宮の収縮を促し早産を引き起こすということで、朗は恐がって私の胸を触らずにいたのだ。

「ほんとだ、大きさが全然違う……」

感触でその違いをはっきりと確認した朗はその感動を隠さなかった。私は心の中で、（やっぱり大きい方がいいんじゃない）と、一瞬無然としたが、自分の願望も叶えれると気を取り直した。

「今夜から、この胸を枕にして眠っていいからね。もうごつごつしてないから気持ち良く眠れるよ」

そう言った私に朗は、「いつもの胸でも気持ちいいんだから。そういうこと言わないの」と、軽く睨んだ目つきで微笑んだ。

翌日、私は高校時代の友達の聡子に会った。彼女も以前、私と同じようにずっと不妊に悩んでいた。それで落ち込みそうになった時、お互いに自分の受けた不妊治療の話などをしながら励まし合い、幸運な事に同時期に妊娠することが出来た。悪

阻の程度も同じ位で、その時期をようやく乗り越え安定期に入ったところで、赤ちゃん用品でも買いに行こうという話になったのだ。私達は電車を乗り継ぎ、赤ちゃん用品やマタニティの専門店に入った。

「この肌着、どんな感触だろう」

売り場に着くと、聡子はいきなり新品のベビー肌着のビニールを開けて中身を取り出そうとした。

「出したらずいんじゃないの？」

私は商品の陳列してある棚に貼ってある『袋から出さないで下さい』の文字を指差した。

「大丈夫だよ、ちょっとくらい」

聡子は全く気にする様子もなく袋に手を入れて肌着に触れた。そのぴったり同じタイミングで、一人の中年の女性店員が近寄ってきた。

「袋から出さないようにお願いします」

その女性店員は穏やかな表情の中に、するどい眼光を光らせながら聡子に注意した。聡子は、「すみません」と申し訳なさそうな声こそ出していたが、本気で謝っていない事が見え見えだった。

「ほら、いわんこっちゃない」

店員がまた元の売り場に戻ったのを確かめてから、私は小声で呟いた。

「でも素早かったよね」

聡子は舌を出しながらいたずらっ子のような顔をした。しかし彼女の言う通り、その店員はついさっきまで遠くの売り場にいたはずだった。その小さく見える姿を私も確認していた。それなのに聡子が袋をがさがさやり始めたと思ったら傍に立っていたのだ。さながら瞬間移動といった早業だった。

私達はこの後妊娠中であることを忘れてしまう位わいわい大騒ぎしながら、三時間掛けてベビードレスやおくるみ、そして自分達のマタニティ用品を買い求めた。それから店を出て近くの喫茶店でお茶をした。

「この前、私、大変だったんだよ」

席に着いた途端、聡子が唐突に切り出した。その直後、大学生位の茶髪で目の周りに濃い目のアイラインを入れたウェイトレスが来たので、二人してオレンジジュースを注文した。その後に私は聡子の話の続きを促した。

「どしたの？」

「私、すごい便秘になっちゃったのね。それでお腹が痛くて救急病院行ったのよ」

「救急病院?!」

妊婦が体に変調をきたすのは珍しい事ではない。だが、救急病院にまで行くとはただ事ではないので私は素っ頓狂な声を出して驚いてしまった。

「うん。腸の中で便が固くなっちゃって、薬で柔らかくしたんだ」

「うんうん」

「そしたらさー」

そこまで言うとも聡子は、なぜか一人で思い出し笑いを始めた。

「どうしたのよ」

深刻な話かと思っていたら聡子が突然笑い出したので、私は不可解極まりなかった。それで訝しげな顔をしていると、聡子がまだ半分含み笑いをしながら「あのね」と説明を始めた。

「下剤が効いてきたのはいいんだけど、車に乗ってる最中に催してきちゃって、レンタルビデオ屋のトイレを借りたんだ。若いお兄さんがカウンターにいて、なんか意味ありげな目で見てるから音でも聞かれちゃったかなって思って口止め料に千円置いてきたよ」

「千円？ それって逆に話の種にしてくれって言ってるような気がする」

「そうなんだよねー。後でそう思ったんだけどさ。その時は『兄ちゃん、喋るんじゃないよ』って思って必死だったんだもん」

聡子は、「ちょっと千円は多すぎたかな」と、ぼやきながらオレンジジュースをズズズッと飲み干した。それにしても口止め料千円という発想が、明朗快活な聡子らしいなと私は思った。と同時に、私は便秘にだけはなるものかと心に誓ったのだった。

## カロリー

---

体重が増加気味と言われた九ヵ月目、私はいつも車で立ち寄る大型書店に行った。食品のカロリー表が載っている本を探す為だ。この手の本は数多くあり、その中から食品の一個辺りのカロリー量が書かれているものを選んで購入した。それを朗に見せながら、「カロリー制限生活を送るんだ」と、得意げに宣言したのは一昨日の夜の事だった。

「臯月？」

日曜の午後、雑誌を読みながらしている私の行いを見て、朗は不思議そうな顔をした。

「ん？」

「間食は控えるって一昨日言ってたんじゃなかったっけ？」

私はその時、カロリーの高いバタークッキーをつまみ食いしているところだった。

「控えるなんて言ってないよ。カロリー制限をするんだよ」

「カロリー制限って事は甘いものを食べないってことなんじゃないのか？」

「違うよー」

私は昨日から付けていた食事とカロリーを記したノートを朗に見せた。

「あのね、一日二千カロリーまでって決めたんだけど、それ以内に食事の量を調整すれば、甘いものも食べられるんだよ」

「ふーん、そうなんだ.....朝食の食パン一枚208カロリーで、ブルーベリージャムが58カロリー、牛乳が122カロリーか。細かく調べたなあ」

「へへえ、そうでしょ。こうやって計算すれば何でも食べられるんだよ。

ほんのちょっとしか食べられないけどね」

「ちょっとでもいいのか？」

「ちょっとでもいいのよ。すべて我慢しちゃうとストレスが溜まるだけで続かないからね。頑張る自分にご褒美としてちょっとだけ食べるの。クッキー一枚だけでも50キロカロリーするからね。エクレアなんて一つ250キロカロリーもするんだよ」

「え？ そんなにするの？」

「うん、だからエクレアは当分食べられないや」

「そっか、可哀想に。そしたら臯月にばれないようにこっそり食べるしかないな」

エクレアは私達夫婦の好物だった。最初のデートでその事が発覚して以来、何か嬉しい事があったり、どこかへ出掛けて美味しそうなエクレアを見つけては二人で食べていた。

「独り占めしていると太るからねー。そうじゃなくたって最近お腹が出てきてるよ」

決して太っているという体型ではなかったが、昔から幼児体型だったという朗は痩せた人よりも変化が如実に表に出してしまう。

「うるさいよ。人のことはいいから。妊婦は子どもに栄養を送らなくちゃいけないから食べた分だけ体に蓄えちゃうんだろ？ エクレアは出産するまでお預けな」

「そんなぁ、まだ二ヶ月位あるんだよ」

「我慢すればするほど、出産、頑張ろうって気になるだろ。産み終わったら分娩台にエクレア持ってってやるから。そこでお祝いしよう」

「そんなこと出来るのかなぁ。看護師さんに怒られちゃうんじゃない？」

「アハハ、そうかもな」

朗はそんな冗談を言いながら、私の胸のすぐ下から大きく膨らんでいるお腹を大事そうに摩った。

安定期に入ってから、体調のいい日を選んでのんびり通っていた母親学級の最後の講義を受け終えた。いよいよ出産の時期が近づいてきたということ意識すると、緊張度が増してしまい、心臓がドキドキして落ち着かなくなる日が多くなってきた。九ヶ月も半ばを過ぎていた。

「朗、私、ちゃんと赤ちゃん産めるかな」

布団に入っても眠れず、隣で目を閉じていた朗に呟いた。腰が砕けそうな程の痛みを襲われるという陣痛を、私はパニックにならずに乗り越える事が出来るのだろうか、それを考えるだけで不安で不安で仕方がなくなるのだ。

「大丈夫。皐月には俺がついてるから。ずっと付いててやるから安心しろ」

朗は目を開けてこちらに体を向けると、私の頭を撫でながら子どもに諭すように言った。

「皐月は頭で考え過ぎて余計な心配を抱えちゃうからいけないんだよ。

だからもう何も考えるのをやめて、妊娠している事を意識しないようにしてごらん」

「うん」

「明日から出産の本を読むの、禁止な。当日は看護師さんが何でも教えてくれるって言ってたから、その通りにしてれば大丈夫だから」

「うん」

朗の言葉に納得して頷いてみたものの、私はすっきりとした笑顔を作る事が出来ずにいた。

「おまじない、して」

私は緊張を強いられる事があると朗にそうせがむ。朗のおまじないはどんなお守りよりも良く効くのだ。

「よし、いいか」

朗はそう言って私の背中に手を当てた。そして幼い子を寝かしつける時のようにポンポンとリズムを取りながら軽く叩き始めた。

「ダイジョウブダイジョウブ サツキハ ブジニ アカチャンガウメルー」

「朗……」

私は朗にしがみつき、半分泣きそうになりながら背中に触れる温もりを感じていた。

「ダイジョウブ ダイジョウブ……」

穏やかに打ち寄せる波のような朗の声を、私はだんだん遠ざかる意識の中でいつまでも聞いて

いた。

## 陣痛、そして...

---

この一週間、十分間隔でお腹に張りを感じるようになっていた。出産予定日は八日程過ぎている。

「朗、なんだかお腹が痛い」

朝刊を配る新聞配達のパイクが、スタンドをカタンと上げ走り去っていった。その少し前から腹部に違和感があった私は、隣で寝息を立てている朗を起こした。

「ん.....皐月、どした？　すごく痛いのか？」

朗はまだ、半分朦朧としている。

「なんか、今までと痛み方が違うの」

痛みの波が来る度に子宮をきゅっと締め付けられる感じがする。耐えられない程の痛みではないが、それがどういう段階を経て強くなっていくのかわからず、私は不安に苛まれていた。私は目を開けたまま布団の中で朗の手を握り締めていた。

しばらくして、生理の時のように液体が膣を流れ落ちるのを感じた。慌てて起き上がってトイレに行くと、敷いていたナプキンに僅かに血がついていた。私はスタートラインに立ったランナーのように心臓の鼓動が早くなるのを感じながら朗のところに戻った。

「朗、もうすぐ生まれるかもしれない」

朗はすでに布団から出て居間のソファに座っていた。外はすっかり明るくなって、鳥が忙しくさえずっている。

「そか、じゃあ病院に電話してごらん」

朗に促されて電話で状況を伝えると、お腹の張る間隔がまだ長いし初産なので午前中の外来に来れば大丈夫でしょう、と言われた。

「外来受けた後、そのまま入院になると思いますって看護師さんが言った」

私は通話の終わった受話器を持ちながら、自分の顔が引きつっているのがわかった。すると朗は外出着に着替えながら「仕事休んでついてってやるから安心しろよ」と、私を勇気付けるように声に勢いをつけて言った。

病院に到着したのはちょうど診療開始時間だった。受付に診察カードを出してから、私は朗に手を引かれながら待合室まで行った。陣痛がくると、お腹の張りが三十秒から四十秒続く。布団にいた時よりも痛みが強くなってきている気がした。

「内田さん、お腹にモニター付けますからこちらへどうぞ」

長椅子に腰掛けて間もなく名前を呼ばれ、出産準備室に通された。ベッドに横になると、モニターと繋がったパッドをお腹に貼り付けられた。看護師さんがモニターのスイッチを入れると、お腹の赤ちゃんの心拍音がドクドクドクッと早いスピードで機械のスピーカーから聞こえてきた。

「しばらく記録してみますね」

モニターから記録紙が吐き出されるのを確かめた後、看護師さんは私と朗を残して準備室を出ていった。

「臯月、いよいよだな」

朗は少々興奮して言った。ところが私は例の如く病院にいるという安心感で、先程までの痛みがまた弱まってきてしまった。

機械に縛られている状態に疲れを感じ始めた時、

「まだ余裕がありそうですね。一度帰られた方が気分的に落ち着くかもしれませんよ」

と、案の定帰宅宣告をされた。しびしび病院を出て帰ってきたのだが、落ち着くどころか何か変化があった時にすぐに対応してもらえない環境に不安だけが大きくなり、私は食欲というものを全く無くしてしまった。

夕方、日が沈んだもののまだ明るさが残っている時間、何をしても気を紛らわす事が出来ない痛みになってきた。しかしまた気のせいだと言われるのが嫌で、ソファーに寄り掛かった状態でもうしばらく様子を見ようとやり過ごしていた。

六時のニュースがすべて終りバラエティ番組が始まる頃、痛みが弱まる事がないと思った私は「もう、病院に行きたい！」と、朗に向かって叫んでいた。

再び病院に着くと、今度は返される事なく予約していた個室に通された。私はまだ多少の笑顔を見せながら、看護師さんの問診に答えていた。内診による子宮口の開きは三センチ。まだまだ余裕ですねと言いながら看護師さんが部屋を出て行った後、病室の天井からぶら下がっている備え付けのテレビで、夜八時からのトーク番組を朗と見た。

消灯時間が過ぎたのでテレビを消し、病室の照明も落とした。激しい痛みが私を襲い始めたのはこの直後からだった。額に脂汗をかきながら肩で息をするようになり、朗は「頑張れ」と言いながら背中を摩ってくれた。看護師さんは「頑張りましょうね」と言いながら、丁寧に呼吸法を教えてくれた。

「フー、フーって息を吐いて痛みをコントロールしましょう」

看護師さんの言う呼吸を、朗の方が先に私の目を見ながら始めた。だから私は朗の息に合わせて「フー、フー」と息を吐いた。

「痛みが治まるときに、体の力を抜いて下さい」

看護師さんにそう言われ意識してみたら、本当に早めに痛みから抜けられるような気がした。

五分に満たない間隔で痛みが押し寄せるのに、看護師さんの内診によると子宮口の開きはまだまだだった。午前三時、先程からと同程度の激しい痛みがずっと続いていた。

カーテンの隙間から白々した空が見え始めた。ベッドに横になった状態では辛くなってきた私は、上体を起こして肛門を押しさえながら痛みを耐えていた。まだ子宮口が開ききっていない為いきんではいけないのだが、痛みが強くて勝手にお腹に力が入ってしまう。その時に肛門を押しえると我慢が出来ると人づてに聞いていたのだ。朗は私が体をよじって苦しそうにお尻を押しえていたのを見て「ここを押しさえればいいのか？」と、すぐに気を回して肛門を押しえてくれた。

「そろそろ分娩室に行きましょうか」

助産婦さんらしい中年の女性が私を呼びに来た。歩いた方が出産を促しやすいということで、痛みの合間にゆっくりと歩いて移動した。朗も立ち会うため白衣を着て準備をした。

分娩台に上がると、万一の為ということで血管を確保するための針を腕に刺された。朗は私の

頭側に立ち、肩を摩ってくれている。

「痛くなったらいきんでください」

分娩室に姿を見せた田山先生が私にそう告げた。しかし前日の昼から食事をしていないのと、半日続いている激しい痛みには私はすっかり体力を消耗していた。

「もっと、いきめない？ ちょっと促進剤入れようか。あと吸引の準備。お腹の上に一人乗って押ししてくれる？」

田山先生が看護師さん達に次々に指示を出した。

「ほら、お母さんも頑張っていきななきゃダメだよ」

田山先生は私にも喝を入れた。そして子宮の内側が子どもの頭にくっ付いてきてしまっているという事で、膣から手を入れて子宮の内側を頭に沿って押し込めている。陣痛の度に吸引機が作動され、別の看護師さんは私のお腹の上にまたがって両手でグググッと押しえ込んで赤ちゃんを押し出そうとしている。私は懸命にいきんでいるのだが、赤ちゃんを押し出すまでの力がどうしても出ない。分娩は二時間が経とうとしていた。

「皐月！ 最後の最後、もう一回いきんで！」

それまで聞こえなかった朗の励ましが私の耳に届いた。そうだ、私は朗の赤ちゃんを産むんだ！ 心の中でそう叫びながら、私は残っていた最後の力を振り絞った。

その時。ぬるっという感触と共に、初めて外界の空気を吸い込んだ新しい命の可愛らしい雄叫びが聞こえてきた。男の子だった。

「はぁ、よかった！ お母さん、頑張りましたね！」

看護師さん達の歓喜のため息と共に、分娩室内の緊迫した空気が一変して和らいだ。

「皐月……頑張ったな……俺、感動した……すごく嬉しいよ……」

お腹の痛みは嘘のように消え、その私に朗の涙交じりの声ははっきりと伝わってきた。そして血液まみれの赤ちゃんは、私の胸の上で朗に見守られながら小さな呼吸を繰り返していた。

「朗……私達の赤ちゃんだね」

私は朗と新しい命を愛しく思いながら呟いた。

「うん、俺達の宝物だ。大切に育てような。……あ、そうだ」

朗は自分の涙と汗を拭いながら、分娩室の隅に置いていたお洒落な紙袋を持ち上げて私に見せた。そして「お祝いしよう」と言いながら中身を取り出した。

「怒られないように看護師さん達の分も買ってきたから」

朗はそう言いながら、そばにいた看護師さん達にエクレアを配り歩いた。

(完)

## エクレアの妊娠

<http://p.booklog.jp/book/101480>

著者：たなかひまわり

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tanahima2327/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101480>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101480>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ